松尾正人著

紹

『木戸孝允』

本体二六〇〇円

吉川弘文館 平成十九年二月 四六判 二六〇頁

然根 籍奉還、そして廃藩置県といった政策遂行の過程で、 戸孝允」では、中央集権化を目指す新政府にあって、 三章「藩体制解体の苦悶」、 御誓文」等を手掛け、名実ともに天皇の復権を企図する れる幕末動乱を生き抜いた木戸が、維新後に「五箇条の 第一章「王政復古と木戸孝允」では、開国か攘夷かに揺 グ、そして第一章から第七章まで、従来あまり検証され 複眼的な視座に立って論じている。構成としては、木戸 動を基軸に据えて、人物交流やその内面の葛藤といった を打ち出す大久保との確執が表面化するなど、政府内 様相を追う。続く第二章「版籍奉還の建言」、そして第 ていない維新以後の木戸の生涯(木戸の後半生)を論じる。 の全体的な生涯について論じたプロローグとエピロー の一人として名を馳せた木戸孝允の人物像を、政治的行 本書は、 強い 藩権力を如何に処理するか、 西郷隆盛、 大久保利通ともに、「維新の三 第四章「廃藩置県断行と木 「藩知事世襲論 傑

追う。いみじくも著者が述べる「幕末の桂小五郎と明治 物研究は、さらに重厚さを増すものと思慮される。 雑な政治情勢に対した「木戸孝允」という一人の政治家 り、まさに木戸の「個性」追求に余すところがない。 問題に対峙した木戸の立場と心境が緻密に考察されてお の木戸孝允の一身二生」に迫る本書は、その時々の時局 の対応と、最後まで郷里の情勢に気を配った木戸の姿を 農民」では、 模索する木戸に迫る。そして第七章「明治国家の士族と 視察し、帰国後は立憲体制の確立と地方との問題解決を 使節団」の一員として国家自立の課題を背負って米欧を 覧」、第六章「立憲制導入に向けて」では、所謂 とした木戸の意図も窺える。第五章「木戸孝允の米欧回 での木戸の苦闘が記される。 「宇内の大勢」「時勢の近情」を遍く天下に知らしめよう 内面を明らかにした本書を魁として、今後も木戸の人 新政府の政策に不満を持つ山口県旧士族へ また『新聞雑誌』を通じて

坂野潤治著

〈ちくま新書

『未完の明治維新

平成十九年三月 新書判 四四 九頁 本体七四〇円

筑摩書房

ついて、

極度に不安定な国家運営を迫られることになった歴史に

著者から見た新たな明治維新の実情を考察して

本書は明治維新を経て「四

つ

の目標」

がせめぎ合い

いる。

現していく為に租税負担者である農民の力を借りようと 兵」「富国」「立憲制」「議会制」の「四つの目標」 退助は民撰議院の早期成立を論じた。著者はこれを「強 木戸孝允は憲法制定による上からの立憲制移行を、 郷隆盛は外政を主張し、大久保利通は殖産興業を唱え、 は、 新が成就した後、 るという、激しく揺れ動いた時代であった。その為、 開国になり、 て挙げ、それぞれが対立状態にあったと述べる。 この四グループに共通してい 明治維新は尊王攘夷と佐幕開国の対立が一転して尊王 指導者同士の様々な意見が対立することとなる。 大政奉還の後に王政復古と討幕がやって来 明治六年から十年にかけての明治政府 たのは、 自己の路線を実 とし 板垣 西

> 未完の明治維新 働ちくま新書

た上で、「四つの目標」は、それを掲げて奮起した四人 が出来るだろう。 ラシー」から、 変興味深い。本書で語られる幕末維新期の「武士デモク きく異なる事から、西郷、木戸、大久保、 る。「スローガンの持つ意味と重さ」は時代によって大 が生きた時代に達成することは無かった、とまとめてい く理解し、近代化へ向けた革命を起こした事実を肯定し 手で、時間をかけて実現していくこととなる。 することは適わず、代わって後の実務官僚と実益政党の ろうとした点にあった。近代思想の波が押し迫るが故に はせず、戊辰戦争を共に戦った武士、 「明治維新」は「永遠に未完に終わった」との考察は大 「四つの目標」はそれを掲げた指導者達自身の手で達成 著者は、 四人の指導者が欧米の「富国」を誰よりも早 新たな「明治維新」について見出すこと 士族軍 板垣による 一団でまとま

五十嵐太郎著

〈ちくま学芸文庫

新編 新宗教と巨大建築』

絽

筑摩書房

平成十九年六月 文庫判 三七五頁 本体一二〇〇円

ト化で、伊東忠太や大江新太郎らにより議論が

繰り返さ



その思想から宗教空間の概念を読み解く。そして、 後の教派神道などの近代の宗教建築や社寺建築を中心に とする。さらに戦後の新宗教も視野に入れ、近代から現 にその概念が現実の空間に反映されたのかを検証しよう に見られほとんど顧みられることのなかった明治維新以 本書は日本建築史の狭間にあって、 戦後以降、 批 いか 判的

映された建築の特質について、その成り立ち、その後の 教祖、 では、 金光教、そしてその後に立教される大本教などを題材に、 一部構成になっており、 教義、教団により形成された宗教空間とそれが反 明治維新前後に立教した教派神道である天理教 第一部「新宗教と巨大建築」

代へと続く新宗教の巨大建築をも展望する。 展開までも視野に入れ考察する。

現代における新興宗教を扱い、宗教空間・宗教建築の といった世界の新宗教、 年)と『近代の神々と建築』(廣済堂出版、 遷から、そこに生きる人々を描き出そうとする。 るなどの試みが見られる。 国主義と植民地主義と地域主義の両面から捉えようとす にも目を向ける。海外神社ではその建築スタイルから軍 として靖國神社や功臣を祀る神社をとりあげ、 議論が集約されていく様子を捉える。さらに伝統の創造 れた近代の神社建築に注目、そして明治神宮の創建へと なお、本書は『新宗教と巨大建築』(講談社、平成十三 またアメリカのモルモン教、 アレフ(前オウム真理教) ヴェトナムのカオダイ教 平成十四年)に 海外神社 などの

の系譜と関東大震災以降の耐火耐震であるコンクリー 第二部「近代の神々と建築」では、明治維新以降 特に神社建築の変遷をたどる。 古式に則る木造 が社

のである。

二編を増補し大幅に改稿し、

寺建築、

449 紹 介

さらに書下ろしを加えたも

紹

中山郁著

。修験と神道のあいだ-木曽御嶽信仰の近世・ 近代—

弘文堂 平 成十九年七月 A 5 判 三五 頁 本体 泣 八 00 Ĕ

新しい宗教的秩序を構築することにあり、 寛の御嶽開 これらの成果は終章で次のようにまとめられる。 教団 かに 章では普寛が組織し 祷を基礎として御座をあみだした。 検討する。 比較しつつ、 では御嶽教の教派神道としての性格を天理教や金光教と の受容と変遷を解明し、 や木曽御嶽開 は木曽御 御 0 嶽 御嶽講社結集と御嶽 講 幕末から 嶽山大滝口の開: 0 山はそのシャー 第四章では御嶽信仰系教団における神道祭式 発生とその教団 祭式の受容と宗教的実践の変容の視点から 山 過程などを在世 明治の た講中 付章に普寛関連史料を収録する 組織化を検証しつつ各教派神道 Ш 者・ ・の展開を修験との マニックな能力により 教の立教過程を辿 化に関する研究書。 木食普寛の御座 時の記録から考察、 初期 0 祈祷活動 修 験 る。 関連で明ら の悪り 儀礼 第 Щ まず普 第三章 中に 創出 章で は 祈

> 置 土

Λ,

た、

派神道教団 指摘する。

0

心

講、

高砂

講

字や祈念の方式の伝授がなされた。

や弟子の

修験

がが

中心であっ

ったが、

しだい

俗

信者

九

山

岳宗教

修 フィー 験

道研 ルド

究 ウー

宗教-

人類

学的

研

究

教

派

信仰論

クと歴史研

究を融合し

近代宗教研究の三つの視点による木曽御嶽

強い

並存したとい

う。 史・

しか

し幕法での弾圧

としての「神道祭式」の受容が伴ったもの テップを踏みはじめた」。こうした動きには 動により「近世の大衆登山講が、 によって広まったところに天理教や金光教などと共通 的特権階級であったのに対 織化する動きも起きた。 を避けて修験や吉田 壌が確認できるとし、 他の教派神道教団と異なり 自立した民衆の 明治維新により組織化のあゆみが途絶え各教 講社争奪に見舞われ の講社結集運 家、 近世 土御 信仰運動 修験組織から相 動 門 の里修験が公認された宗 家に 在俗者の祈祷 「民俗性豊かな行法」 るが、 自ら近代教団というス 下 の萌芽でも 修験と神道のあいだ 所属 Ш 応助による立 関東の普寛講 Ó 対的に あ 講全体を 治 組織 文明 つ 修験の現場を見続けてきた研究者による 距離 病活 た 一クな修験道一教派神道関係史 教運 力の لح 組 を 教 0

絽

中

〈中公新書

第

-央公論新社 平成十九年十二月 新書判 二五八頁 本体八二〇円

戦争』の新書である。
西南戦争は明治十年二月から九月までの八ヶ月に渡る西南戦争は明治十年二月から九月までの八ヶ月に渡る近代日本最大、そして日本史上最後の内戦であり、日本近代日本最大、そして日本史上最後の内戦であり、日本近代日本最大、そして日本史上最後の内戦であり、日本近代日本最大、そして日本史上最後の内戦であり、日本近代日本最大、そして日本史上最後の内戦であり、日本

本書は、戦争に際して人々が描いた理想や戦争の大義名分に焦点を当てつつ、反逆の伏線を形成した明治六年の政変から、熊本城篭城戦、田原坂の戦い、九州各地での政変から、熊本城篭城戦、田原坂の戦い、九州各地での戦闘、そしてその後の処罰や批難を経て後、西郷隆盛の戦闘、そしてその後の処罰や批難を経て後、西郷隆盛の戦闘、そしての烙印を消されることとなるいる。

え不利な状況にあっても「西郷ならば」という期待感を郷隆盛」である。西南戦争時、西郷が率いる薩軍はたと注目すべき点は、著者が述べる「シンボルとしての西

「理想」を抱かせた。さらに西郷がこの世を去ろうとす 死後、 にされている。 盛の存在が示す た」と述べる。戦争という歴史的背景と同時に、 て「西南戦争という未完の反逆は、その伝説の嚆矢であっ 針ともいえる存在へと昇華した。著者はその歴史につい 像に神秘性を加え、 としやかに囁かれた「西郷生存説」等の伝説がその人物 る時東京や大阪の空に輝いた「西郷星」や明治後期まこ 悲劇や沈黙者として語られることにより、人々に多様な 抱いていた。生前から人々に強い希望を抱かせた西郷は、 変革者としてのイメージやその人格、そして時に 「理想」とは何かが本書によって明らか 後世の「理想」を語る上で一つの指 西郷隆

ておきたい一冊である。に何を残したのか。近代史を改めて学ぶ上でも目を通し

西南戦争とはいかなるものであったか、それは後の世

内藤

成著

貴族院

紹

.成社

平

成二十年二月

四六判

几 |八頁

本体二

同 成社近現代史叢書 12

からなる有爵議員・勅撰議員・多額納税者議員 あった。 臨 られない貴族院は、 帝 ることを目途としている。 タビューの成果をも活用して貴族院特有の雰囲気を伝え はその各時代を牽引した会派やその領袖などに焦点をあ は多くの曲折があり、様々な勢力の消長があったが、本書 リージェを発揮したところにあったという。その歴史に ンティティは、 士院会員議員という多様な構成を持った貴族院のアイデ 0 て、各種史料のみならず、 本書 み、 歴史を著したものである。 国憲法下の帝国議会を衆議院とともに形成した貴族院 は、 藩閥や元老に対しても独自性を維持した存在で 華族、 明治二十三年より昭和二十二年に至る大日 官僚、外交官、 政策や主義主張ではなくノブレス・ 非政党主義で政党には厳しい態度で さらに、 旧貴族院議員、 廃止後、 学者、実業家、 貴族院と参議院 現在まで殆ど顧み 華族へのイン ·帝国学 地主など の関 オブ 本

義、

係は組織的には断絶しているものの、

前者から後者への

書籍としては初めての本書からその意義を再考したい。

貴族院 して、 極的に捉えてきた。 [思文閣出版 決して小さくない。 の存在として近代日本の政治史における貴族院の位 されるように、さまざまな問題や批判もあったが、 と努めた歴史であった。度重なる貴族院改革論議に象徴 れらは、 の歴史と貴族院の位置付けから説き起こす 導入が検討された経緯、近代日本における議会制度導入 のような観点をふまえつつ、 巨視的に捉える際に少なからぬ意義があるとする。 影響をも考えることにより、 八〇〇円 政党政治との関係 初期議会における貴族院の様相 (第五章)、貴族院の終焉 政党を中心とする立憲政治の発展に寄与しよう 平成十七年』をも著し、 内藤氏は既に 般向けに書かれた貴族院に関する (第三章・第四章)、戦時下における 本書はまず幕末期に立憲制 貴族院の検証は議会政治を (第六章) までを描く。 内藤一成 貴 (族院 『貴族院と立憲政治 その意義と役割を積 (第二章)、 (第一章)。 0 0 政党主 0 以上 置 独自

國學院大學日本文化研究所編

『近世の好古家たち―光圀・君平・貞幹・種信―

雄山閣 平成二十年二月 A5判 二四六頁 本体三二〇〇円

問・ 塚の発掘調査に着実な考証を加えた光圀の学問姿勢と行 査する―」では、「義の人」光圀をキーワードとして、侍 弘氏「黄門様の考古学―一六九二年光圀、侍塚を発掘調 講演会記録は「近世四人の学者」と題され、まず眞保昌 ち考古学の淵源をつぶさに検証する必要性が確認された。 がなされ、 纏めたものである。座談会では、各分野からの意見交換 者との座談会と学術講演会、そして公開シンポジウムを 近代ヨーロッパ Archaeology 日本上陸以前の考古学的学 れ、「学史」を見てゆく上でも、特に近世の学問、そのう 人物の書簡蒐集に情熱を持たれた斎藤忠氏と四人の研究 國學院大學日本文化研究所主催「近世学問を検証する― 本書は、 国学者に光をあてる―」において、若年時より歴史 現在の文化財保護理念に通じることが指摘さ 徳川光圀に代表される「資料を後世に託す」 平成十六年から同十九年に掛けて行われた、



世日本の学問実態を知る上でも必読の書である。 学の鼻祖」とも評されながら、その考証方法にあっては ムも収載されており、考古学分野はもちろん、膨大な近 容を収めている。その他國學院大學の研究者によるコラ 録では、如上の講演者を交え、さらに掘り下げた議論内 古学者としての側面が検証されている。シンポジウム記 では、国学者として名を残す種信の著書分析を通じて、考 氏「青柳種信の好古学―拓本と正確な実測図で論証―」 営為」であったことが指摘されている。最後に栁田康雄 つ、貞幹の考証とは「古製」を考え知るための「学問的 情熱と逸脱―宣長を怒らせた男・藤貞幹―」では、「考古 の再検証が呈されている。そして阪本是丸氏「好古への た苦心の様相を追い、戦後顧みられることが少ない君平 の一人として知られる蒲生君平の歴代天皇陵探索に掛け 生君平と宇都宮藩の山陵修補―」では、「寛政の三奇人」 いまだ毀誉褒貶の激しい貞幹の人物像と心理に肉迫しつ

動に迫る。

次に篠原祐一氏「前方後円墳の名付け親―蒲

近藤啓吾著

。吉田松陰と靖獻遺言』

錦正社 平成二十年四月 A 5 判 六三頁 本体二五 100円



跡、 とを、浅見絅斎著『靖獻遺言』を読了し感激を記した事 王の教えのみならず、崎門の学が松陰に影響しているこ 書」、「後記」となっている。まず、「一」~「六」によっ 書簡」、「参考 一、社稷の臣―寇準と韓琦― 二、杜甫 陰と『靖獻遺言』、一二、吉田松陰『留題村塾壁』詩につ とされたものである。本書の構成は、「序」、「一、吉田松 解説しつつ のか、その背景が記される。わけても、「一」は、水戸尊 と文天祥―『集杜詩』について― 三、謝枋得とその著 の精神」、「五、『講孟箚記』解題」、「六、吉田松陰先生の いて」、「三、佐久間象山と吉田松陰」、「四、 ている「留題村塾壁」詩を解説しつつ、松陰が天壌無窮 て、松陰が如何なる書を読み自らの血肉として行動した 意義や背景について著された新旧稿を整理編輯して一書 本書は、吉田松陰が読み記した古典・詩文、そしてその 更には同書中に登場する八人を題として詠じた詩を 証する。また、 三は、 『幽室文稿』に収め 「講孟箚記

特色が記され、「五」には、日本学協会刊本 と象山との師弟の深き心交の様が記される。また、「四 獻遺言』に伝が収められる謝枋得、 烈士文天祥が獄中誦して自己を励ました杜甫の詩、『 『宋名臣言行録』の眼目、松陰の詩にも詠じられた宋末の と内容上関連の深い「参考」の各章は、松陰が愛読し 録の二通を含む四通の書簡の解説である。そして、本編 では、『講孟箚記』に現れる松陰の思想の根本、学風の 感動した松陰がそれを獄中写録した事等を通して、 の「天の将に大任を是の人に降さんとするや…」の章に て論じる。そして「三」では、 できると信じ、天下国家の為に奮起した事跡を背景とし の神勅を信ずるゆえに大道が糜爛した状況をも必ず打開 「解題」文が載録されている。「六」は、『全集』未収 詩文・ 足跡等を解説したものとなってい 獄中象山が誦読した孟子 それぞれについての 『講孟箚記

講孟箚記全譯註』

(講談社学術文庫)と併せて繙かれたい。

紹

慰霊と顕彰の間 ―近現代日本の戦死者観をめぐって―』

錦正社 平成二十年七月 A5判 三一五頁 本体三二〇〇円

調学収入学研究開発開発をシター編
は、現実と頻彩の間
及研以するの様にあります。

東京 は

変別にするの様に対して、

変別にするの様に対して、

変別にするの様に対して、

変別にするの様に対して、

変別にするの様に対して、

変別にするの様に対して、

変別に対して、

変別に対別に対して、

変別に対して、

変

巻頭 追悼、 足を指摘、 大誠氏の論考と主要研究文献目録などを収録したもの。 本の慰霊・追悼・顕彰研究の現状と課題」を纏めた藤田 日)と、池上良正氏をゲスト・スピーカーに迎えての第 進に努めており、 術交流」(阪本「『慰霊と顕彰の間』の刊行に寄せて」) 個の人間〉 想的対立を惹き起こしがちな戦歿者(戦死者) 平成十八年創設) のうち、シンポジウム「慰霊と顕彰の間 回研究会(平成十八年十月七日)の各記録、さらに 戦死者観をめぐって」(第七回研究会、 咸 |學院大學研究開発推進センター(阪本是丸センター長 0 或は顕彰というテーマを前にして、お互いを 藤 田論考は神道的な慰霊・追悼・顕彰の研究の不 として尊重し合うなかで冷静かつ建設的な学 本書中幾人かがこの点に言及している。 0) 現在も活動を継続中である。本書はそ 「慰霊と追悼研究会」は、「先鋭な思 平成十九年二月十 近現代日本 の慰霊と の促

第二 道 「シズメ」と「フルイ」の視点による西村明氏 すますの発展が期待される。 とがき」)という、 その研究成果を広く学界や社会に提示する」(中山郁 本人の信仰、 究者が主体となった読み応えのある共同研究の成果であ 問題提起をうけての長時間にわたる討議である。 まで共感をもって向き合うだけの力があるのか」という 仰の個人性」における、 のリプライ、フロアからの質疑を交えた討議を収める。 の各報告、それに対する大谷栄一氏のコメントと報告者 塔に着目した粟津賢太氏「戦地巡礼と記憶のアリー 国家神道と靖國神社に関する一考察」、 研究に軸足を置きながら、「人を神に祀る」という日 実証的手法を重視した学際的研究交流、そして「 回研究会の記録は、本書に再録の池上論文「靖國信 霊魂観を通史的、 研究会の大きな目標」に向けて、 遺族たちの多様な信仰に「どこ 系譜的に理解した上で、 旧植 民地 「慰霊再考 若手研 0 池霊

ポジウム録は近代神道史上の戦歿者慰霊を問うた藤田氏

今泉宜子編・明治神宮社務所発行

『明治神宮 戦後復興の軌跡

鹿島出版会 平成二十年十月 菊判 三〇八頁 本体二〇〇〇円

(No. A. of the distance of the control of the con

かなど)、 明治神宮の造営計画 之助が再興した隔雲亭、 円の募金運動とそのリーダー達、 の出発 上(御神霊をお護りして、宝物殿での一夜など)、 レー に詳しい人々の聞き取りを行い、 辺の戦後のあゆみを豊富な写真とともに辿る。 の再建までの明治神宮の歴史を収録。第一章では社殿炎 所蔵資料の調査に加え復興に携わった人々や渋谷の歴史 一十分の 明 復興を支えた心意気」には戦災焼失から昭和三十三年 占領下の明治神宮など)、復興奉賛運動の原動力 釿始祭から始まる木工事、 だ神宮の社殿復興五十年を記念し、 明治神宮復興物語」・第二章「代々木の杜再生物語 (全国から寄せられた手紙、 復興造営工事の進展 の図面を生み出す技、 (中門から内拝殿へ、木かコンクリー 造営奉仕を願い出る人々など)、 立柱祭から上棟祭へ、不眠不休 建築資材の物品奉納、 総棟梁中島幸治郎の現寸引付 (明治神宮臨時造営部の発足 仙台青年学徒の御用材献 第一章「まごころの 神宮と鎮座 焼け跡から 明治神宮 松下幸 (六億 地 1] 唐

都市· 0 力)・日下公人(復興の底力と日本精神)の各氏が生活・建築 代」では、 第四章「プロフェッショナルの視点 宿・代々木・千駄ヶ谷在住の十数名の聞き書きを収録する 弓枝氏・山本一力氏・森泉氏へのインタビュー 重氏・原宿表参道欅会の松井誠一理事長による鼎談、平 の思い出』著者の家城定子氏・原宿隠田商店会長の佐藤 での聞き取りを当時の写真や地図とあわせて紹介。『原宿 伝えの戦後史 加勢造園などの敬神篤志団体の功績を綴る。第三章「口 組·大九報光会·健児奉仕隊·明治神宮農林水産物奉献· 0 (建築家角南隆の最高傑作)・陣内秀信 儀など) 錺金具取り付けなど)、甦った代々木の杜 ・精神の専門家として語る。 の記録、 山崎貴 渋谷オーラルヒストリー」では周辺地 第二章は明治神宮靖國神社献饌講・間 (昭和三十年代のエネルギー)・藤岡洋保 巻末に「数字で見る復 (都市空間 神宮復興とその (本殿遷座祭遷御 のほか 「原宿」の魅 会 Ш 銀 域

造営」

や関係年表を収録するなどユニークな一冊である。

『古事記の「こころ」

介

絽

郎著

―伊勢神道の視点から―』

ぺ りか ん社 平成二十年十月 四六判 三四 頁 本体二八〇〇円

宇宙の真理を直観的に把握したものであることを、 第一回「天地開闢」では『古事記』の一即多の思想は大 敬会有志による輪読会の発表原稿がもとになっている。 試みたのが本書であり、著者の奉職する湯島天満宮の崇 ような問題意識から伊勢神道の心神思想をもとに解釈を 点から考察したものは極めて少ない」(はじめに)。この 多くの成果があるものの、「神代の神々の古伝承を理解 もとに解説。第二回「天つ神と国土の修理固 五部書の『宝基本記』や度会延佳の『中臣祓瑞穂鈔』を するために、 「天つ神諸の命もちて」とは伊邪那岐神 『古事記』 の解釈は本居宣長の『古事記伝』をはじ 客観的な視点からではなく、同じ神々の視 ・伊邪那美神の |成 では



邪那美命の姿は、……伊邪那岐命の御心の状態を隠喩と 具土神ではなく、あくまでも Ļ 神々の御心に回帰することを提唱する。 孫の誕生と天孫降臨」を収録。真の幸福のため、 戸」、第十一回「五穀の起原と大蛇退治」、第十二回 生」)。以下、第八回「須佐之男命の涕涙と昇天」、 天つ神の御心と一つになった」(第七回「禊祓と神々の化 して象徴的に語っている」のであり に映っている火之迦具土神」と説く。「変わり果てた伊 清らかな心を日々の修養によって得ることが大事」と けずに、大綿津見神、志那都比古神、……と信じていた 口 「禊祓によって伊邪那岐命は、ご自身の本性に感応し、 誓約と須佐之男命の勝すさび」、第十回「天の 第五回「火神被殺」では「斬ったのは眼前の火之迦 神々の生成」では「古代の日本人が、 〔伊邪那岐〕命の内面の心 (第六回 何の註釈もつ 「黄泉の国」)、 遠祖 石屋

において同一であると信じていた」と指摘する。 先祖が「神々と国土と私どもの「いのち」は、 とと説き、第三回「二神の結婚と大八島国の生成」では 御心に天つ神が鎮座し「いのち」を神与のままに守るこ

その根底

石井研士著《中

〈中公新書クラレ〉

『テレビと宗教―オウム以後を問い直す―』

中央公論新社 平成二十年十月 新書版 二五三頁 本体八四〇

宗教関連番組 押し付けているようにしか思えない」(第一章)と批判し、 後の世界観、 たない子どもたちに対して、 組を垂れ流している放送局の態度を一なにもガードを持 高まっていくことを指摘した上で(序章)、それらの番 成長期以降、 祖先崇拝を基盤とした「家」の宗教意識が低下する高度 月十六・二十三日)を寄稿してきた(あとがき)。 霊番組野放し」(『読売新聞』 道のみで存続していく日本の現状を危惧し、一テレビ心 者はかねて、 る事実を豊富なデータで論証した学問的良心の一 「宗教のバラエティー番組化」(『東京新聞』 スポンサー ビという社会制度が宗教に大きな影響を与えて 宗教文化がテレビの娯楽番組やニュ あるいは不思議な力を、 テレビでの超能力や心霊、占いへの 0 あり方に制作者や放送局、 行政、 さらには宗教者や宗教団体、 平成十五年八月十三日夕刊) 一方的に極端な霊魂観 おもしろおかしく 視聴者、 平成十九年一 本書では 対関心が ーース報 # や死 研

三者機関による評. 現状の認識、 要性を提言している い宗教団体の危険性を煽っている」(第七章)。こうした 性を浸透させ、 に放送し、「日本人のあいだにバラエティとしての宗教 テレビは依然ステレオタイプ化された宗教映像を恒常的 道を契機に宗教関連番組への批判も起こったが 放送されることがなく(第五章)、 における救援活動など宗教団体の公益的活動はほとんど テレビには受け継がれなかった(第四章)。他方で災害時 戦後ラジオの教養番組で起こった「宗教放送ブーム」 判もなく大衆娯楽として定着したためであり(第三章)、 能力番組が平然と放送されるのは、これまで目立った批 法や民放連放送基準に矛盾するにもかかわらず心霊 究者も無関心であることを問題提起する 0 Ĕ 放送基準の遵守、 伝統宗教を伝統行事へと押し込め、 価 機構、 (終章)。 影響力の調査、 宗教への偏見の排除、 過熱しすぎたオウム報 (第二章)。 宗教教育の必 (第六章) 放送